



TITLE:

# 16世紀ファイユーム県の水・税・ 記録管理：オスマン朝エジプト統治 初期の水利行政に見る統治体制と その展開

AUTHOR(S):

熊倉, 和歌子

---

CITATION:

熊倉, 和歌子. 16世紀ファイユーム県の水・税・記録管理：オスマン朝エジプト統治初期の水利行政に見る統治体制とその展開. 東洋史研究 2014, 73(3): 506-471

ISSUE DATE:

2014-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/228950>

RIGHT:

# 16 世紀ファイユーム県の水・税・記録管理

—— オスマン朝エジプト統治初期の水利行政に見る統治体制とその展開 ——

熊 倉 和 歌 子

## 序 言

1. マムルーク朝の延長か、変化か  
—— エジプト統治体制をめぐる 2 つの見解 ——
2. ファイユーム県の地理的特色と位置づけ
3. 灌漑の維持管理の仕組み  
(1) 灌漑設備の維持管理費 (2) 維持管理の割当てとアクター
4. 維持管理における記録管理の変化

## 結 語

## 序 言

オスマン朝史において 16 世紀は、スレイマン 1 世（位 926-974/1520-1566）によって中央集権的な統治体制が確立された時代として位置づけられている<sup>(1)</sup>。本稿は、そのようなオスマン朝の中央集権化の動きの中で、エジプト州統治がいかに進められていったかについて、エジプト中部のファイユーム県における水利行政に焦点を当てて考察する。物理的な距離を指標とすれば、エジプト州はオスマン朝の周縁部に位置するが、さらにその地方という、言わば王朝の末

(1) オスマン朝史におけるスレイマン 1 世期の位置づけと中央集権化の概括については、[İnalçik 1973: 3-4; 鈴木 1993: 21-27; idem 1997: 121-127; 林 2008: 118-120, 143-149; Şahin 2013: 4-5] を参照。

端部に考察の場を置き、そこに見られる水利行政を縁としてオスマン朝の統治体制の展開を究明する事が本稿の目標である。考察の手順は、最初に、16世紀エジプト州におけるオスマン朝の統治体制に関する先行研究を整理し、その問題点を示す。次いで、エジプトにおけるファイユーム県の位置づけを明らかにする。その上で、維持管理費の財源や維持管理を担ったアクターを明らかにし、灌漑の維持管理のあり方について考察する。最後に、16世紀前半に見られる水利行政の変化を取り上げ、オスマン朝の統治体制との関連性について検討する。

### 1. マムルーク朝の延長か、変化か —— エジプト統治体制をめぐる2つの見解 ——

922/1517年、オスマン朝はマムルーク朝(648-922/1250-1517)を倒し、エジプトにおける支配権を確立した。その後、当地において、ジャーニム Jānim とイーナール Īnāl の乱(929/1523)およびエジプト州総督アフマド・パシャ Aḥmad Pasha の乱(930/1524)という2度の反乱を経験し、「カーヌーン・ナーメ (*Kānūnnāme*: 法令集成)」の発布(931/1525)に至った。この新たな法の導入は、エジプトにおける本格的なオスマン朝支配の始まりと見なされている<sup>(2)</sup>。

しかし、その支配がどのような統治体制に基づいていたかという問題については2つの見解がある。第1に、マムルーク朝の統治方法は継承され、他のアラブ地域とは異なる独自の統治が展開されたとする見解であり、ホールト Peter M. Holt やウィンター Michael Winter らがこの説をとる<sup>(3)</sup>。この説の主

(2) オスマン朝のエジプト統治初期の概略については、[Holt 1966: 46-52; idem 1968b: 80-81; Winter 1992: 7-16; Lellouch 2006; Hathaway 2008: 51-56; Masters 2013: 27-29; Şahin 2013: 55-59]を参照。また、この時代を対象とした研究の難点や研究状況については、[Hanna 2012]に明快にまとめられている。

(3) ホールトは、「カーヌーン・ナーメ」が規定する行政はマムルーク朝の特徴を継承した事を指摘し、エジプトはシリア地域とは異なり、オスマン朝の統治システムに完全に統合されなかったとした[Holt 1966: 51-52]。ウィンターも同様に、「カーヌーン・ナーメ」においてスルターン・カーイトバーイが制定した法の維持

な論拠は、「カーヌーン・ナーメ」の規定において、マムルーク朝スルターン・カーイトバーイ al-Ashraf Qāyṭbāy (位 872-901/1468-96) の時代の法を維持する旨の文言が繰り返されている事にある。これに対し、ハサウェイ Jane Hathaway は、土地制度と統治構造に変化があった事を論拠として、マムルーク朝からの統治体制の不変性を強調する上記の見方に異議を唱え、オスマン朝はマムルーク朝と従来のオスマン朝の統治体制の両方の特徴を併せ持つハイブリッドな統治体制を打ち出したとした<sup>(4)</sup>。このように、「カーヌーン・ナーメ」発布以降のオスマン朝のエジプト統治体制をめぐる議論については、それがマムルーク朝の統治体制を継承したか否かという観点から説述されている。

しかしながら、16 世紀オスマン朝の統治体制の説明としては、これらの議論は不十分である。まず、そもそものところ「カーヌーン・ナーメ」において「カーイトバーイ時代の慣行 (‘ada) と法 (qānūn)」の維持について言及されるのは、全 22 条のうち 5 条においてのみである。【表 1】は、その 5 条の中に見られるカーイトバーイ時代の法の内容と、それが「カーヌーン・ナーメ」発布以降継続されたか否かを纏めたものである。この表から分かるように、「カーヌーン・ナーメ」に言及されているカーイトバーイ時代の法というのは、11 件中⑤を除く 10 件が税に関わる事項であり、マムルーク朝の統治との連続性についてはエジプト統治全体に適用できるものではない。また、「カーヌーン・ナーメ」ではカーイトバーイ時代の慣行と法が採用された事項がある一方、廃止された事項も見られるが、前者の説では、この事は等閑視されている。例えば、【表 1】の②は、カーシフ (kāshif)<sup>(5)</sup> が農民からディヤーファ (ḍiyāfa: 徴

↙ が明示された事、マムルーク朝の土地や称号、人材が継承された事を論拠として、マムルーク朝の統治体制が維持された事を強調し、エジプトの行政への介入は最小限に留まったとした [Winter 1992: 17; idem 1998a: 3-4]。

(4) 土地制度と統治構造における変化として、エマーネット制の施行とエジプト州総督がイスタンブール中央政府から派遣されるようになった事が挙げられている [Hathaway 1997: 9-11; idem 2008: 51]。また、不変性を強調する前者の説に対する批判的研究 [Hathaway 2003] も参照。

(5) スルターニー・ジスル (jusūr al-sultāniya: スルターンの灌漑土手) のカーシフ (監督官)。この職は、バフリー・マムルーク朝 (648-784/1250-1382) 期から ↘

表1 「カーヌーン・ナーメ」における、カーイトバーイ時代の慣行と法に関する記述

	条 [該当頁]	概 要	継続/廃止
①	エジプトの村々のカーシフたち [360]	徴税について：カーシフたちは、カーイトバーイの時代同様、『徴税台帳 <i>irtifā' defterleri</i> 』に従い、その土地に課せられたものを集める。	継続
②	〃 [361]	農民から貢ぎ物を徴収することについて：カーイトバーイ時代には、カーシフたちは各村の農民各人から貢ぎ物を徴収していたが、それは廃止された。	廃止
③	〃 [361]	「カーシフの税」について：カーシフは、カーイトバーイ時代の慣行と法に従い、カーシフの税を徴収する。	継続
④	〃 [361]	ジスル（土手）や浚渫に充てるための税について：カーシフは、カーイトバーイ時代の慣行と法に従い、ジスルや浚渫に充てるための税を徴収する。	継続
⑤	〃 [361-362]	灌漑設備の維持管理について：農民たちはカーイトバーイ時代の法に従って、灌漑設備の維持管理作業をしなくてはならない。	継続
⑥	アラブ部族のシャイフたちの状況 [364]	「シャイフ職の税」について：カーイトバーイの法において徴収されていたアラブ部族のシャイフ職の税は、正しいものではなく、許されない。	廃止
⑦	〃 [364]	雑税の徴収について：カーイトバーイ時代に徴収されていたものよりも多くの雑税を徴収してはならない。	継続
⑧	〃 [365]	スルターンへの贈物について：カーイトバーイの時代に慣しであったように、アラブ部族のシャイフたちはスルターンに対して贈物をしなくてはならない。	継続
⑨	港湾と開港の状況 [370]	商人から徴収される税について：港湾においては、カーイトバーイ時代以降運用されている慣行と法に従い、商人たちから雑税と十分の一税が徴収される。	継続
⑩	土地のハラージュ税の状況 [373]	徴税吏や官僚へ支払われる雑税について：カーイトバーイ時代以降、農民には官吏や官僚に対して支払う雑税が課されていたが、廃止された。	廃止
⑪	測量の状況 [374]	測量の雑税について：カーイトバーイ時代の慣しに従い、測量の雑税は維持される。しかし、チェルケス期に見られたようなそれ以外の名目での税の徴収は廃止された。	継続

(筆者作成)

待料)として羊を徴収する慣行の廃止を規定している。また、⑥のアラブ部族のシャイフ職に支払われる雑税、および⑩の徴税吏や官僚へ支払われる雑税も同様である。一方で、犯罪の処罰については、オスマン朝の本土(Rum vilāyeti)で施行されている法を導入する事を定めている[*Kānūnnāme*: 362]。このように、「カーヌーン・ナーメ」はカーイトバーイ時代の統治方法のコピーではない。それが下敷きになっているとはいえ、オスマン朝の統治方針と照らし合わせた上で可とされれば継続、不可とされれば廃止となり、それにオスマン朝独自の法が加えられて構成されているのである。この点において、ハサウエイの「ハイブリッド」説は妥当である。しかし、ハサウエイの説もまた、オスマン朝政府がどれだけエジプト統治に関与しようとしたかについては不明瞭である。この点について明らかにするためには、实际的な記録等に基づく実態の解明が不可欠であろう。

このように、16世紀におけるオスマン朝統治体制の中でのエジプト州の位置は曖昧模糊としており、オスマン朝期エジプト史研究は不安定な土台の上に積み上げられていると言っても過言ではない。1517年を境に、エジプトはマムルーク朝という王朝の中心から、オスマン朝の周縁となった。そのエジプトの位置を歴史的に明らかにする為には、絶えず、イスタンブルのオスマン朝中央政府との間の距離と関係性を見定める必要がある。とはいえ、いまだに定説と呼びうるものが確立されていない背景には、同時代の年代記史料やシャリー

---

ㄨ 見られ、「ジスルのカーシフ (kāshif al-jusūr)」や「泥土のカーシフ (kushshāf al-turrāb)」とも呼ばれた [*Subḥ* 3: 444-445; *Zubda*: 129-130]。バフリー・マムルーク朝期におけるカーシフの主たる職務はその名の通りジスルの再建であったが、チェルケス・マムルーク朝(784-922/1382-1517)期以降、地方行政において重要性を増していった。ファイユーム県とバフナサーウィーヤ県においては、スルターン・バルクーク al-Zāhir Barqūq (位 784-791, 792-801/1382-89, 1390-99) が県行政の長たるワーリー (wālī: 長官) を廃止して以降、ワーリーに代わってカーシフが置かれるようになった [*Subḥ* 4: 65; 'Abd al-Rashid 1999: 35]。この職は、オスマン朝にも引き継がれ、「カーヌーン・ナーメ」にもその職務規定が明記された。マムルーク朝期のカーシフについては、['Abd al-Rashid 1999: 48-53] を参照のこと。

ア法廷台帳が僅少であるという問題があるからであり<sup>(6)</sup>、この問題を解決する為には別方向からのアプローチが要求される。

翻って 17 世紀以降の状況に目を向けると、イスタンブル中央政府とエジプトの地方行政との結びつきが見えてくる。例えば、イスタンブルの御前会議、カイロ総督会議、エジプト地方都市のシャリーア法廷の間での文書の遣取が挙げられる。エジプトの各県に所在するシャリーア法廷の台帳には、イスタンブルから送達される勅令 (marsūm, fermān) や、カイロの総督会議 (diwān) から発行された命令書 (buyūruldi) が書写された。これらの勅令や命令書は上意下達式に一方的に法廷に送られてくるだけでなく、シャリーア法廷が判決の権限を持たない問題が生じた時に、その判決を総督会議ないしは中央政府に委ねた結果、判定が記された勅令や命令書が送られてくるということもあった<sup>(7)</sup>。一方、人の動きに目を向ければ、エジプト各地のシャリーア法廷のカーディー (qādi: 法官) は、オスマン朝の任官候補 (ミュラーゼメット mülāzemet) 制度<sup>(8)</sup>に基づいて派遣された<sup>(9)</sup>。これらの事は、少なくともマムルーク朝時代から考えれば大きな変化と言える。なぜなら、マムルーク朝時代にはカイロのスルターンを頂点とする統治機構であったのが、17 世紀にはエジプト州の地方都市が文書行政を通じてイスタンブルのスルターンとその御前会議と結びついていた

(6) オスマン朝時代初期のエジプトに関するアラビア語史料については [Holt 1968a] を、トルコ語史料については [Shaw 1968] を参照。

(7) 灌漑設備の調査や建設を命じる勅令の発布の事例については、[Reg. 1058-000004: 192; Mikhail 2010; idem 2011: 58-66] を参照。

(8) ミュラーゼメット制とは、イスタンブルの最高学府と見なされたマドラサでハナフィー派法学の教育を修めた者に任官資格を与え、任官資格者名簿に登録する制度であり、この名簿に基づいて各地の地方法官職や教授職の任命が行われた。当該制度については、[松尾 1996; 林 2008: 147-149] を参照。

(9) ナハル Galāl el-Nahal に拠れば、17 世紀において、エジプト州の大カーディーであるカーディー・アルアスカル (qādi al-‘askar: カザスケル、軍人法官) は、シェイヒュルイスラーム (şeyhülislam) が管理する登録簿から任命され、スルターンの承認を得て着任した。一方、エジプト州の地方都市のシャリーア法廷のカーディーは、アナトリアのカザスケルによって任命された [El-Nahal 1979: 13-17]。

為である。それは、オスマン朝のエジプト統治政策が消極的・間接的なものに終始したわけではなかった事の証左である。

この事を踏まえ、本稿は灌漑の維持管理体制の連続性と変化に着目し、冒頭で掲げた問題について検討していく。灌漑を考察の中心として取り上げた理由は、降水量が限りなく零に近いエジプトにおいて、ナイル川に依拠した灌漑が地方統治のみならずエジプト統治全体の要であった為である。時の政権は灌漑の維持管理を行う事によって土地から最大の利益を引き出し、その一方で村落社会に水利用のインフラストラクチャを提供するという役割を担ったのである。

さて、本稿で用いる主な史料は、以下に挙げる 16 世紀の実記録である。①はイスタンブールのスレイマニエ図書館 Süleymaniye Kütüphanesi に、それ以外の台帳はエジプト国立文書館 Dār al-Wathā'iq al-Qawmīya に所蔵されている。

① オスマン朝統治初年の徴税調査記録 ([MS. Ayasofya 2960])

この記録は、アイユーブ朝 (567-648/1171-1250) 時代のファイユーム県の調査記録である『ファイユームとその村々の歴史 *Ta'riḫ al-Fayyūm wa Bilādihi*<sup>(10)</sup>』(以後 *Ta'riḫ* と略記) のアヤソフィヤ写本 MS. Ayasofya 2960 に併録されたものである<sup>(11)</sup>。これには、ファイユーム県の村々のうち、ザヒーラ庁 (diwān al-dhakhīra)<sup>(12)</sup> 財源である 27 村を対象とした、1517 年 9 月から始まるハラー

(10) ナーブルスィー Fakhr al-Dīn 'Uthmān b. Ibrāhīm al-Nābulusī al-Ṣafadī (没 660/1261) が著したこの書については、[佐藤 1986: 264-265; Rapoport and Shahar 2012: 1-3; idem online: "The Tax Register"] を参照。この書の写本は、現在普及している校訂の底本であるエジプト国立図書館 Dār al-Kutub al-Miṣriya 所蔵のカイロ写本 (MS. Tārīkh 1594) とアヤソフィヤ写本の伝世が確認されている。

(11) MS. Ayasofya 2960 の表紙に記された書名は『ファイユームの村々の秩序についての永世者にして自存者たる神の御業の書 *Kitāb Iẓhār Ṣan'at al-Hayy al-Qayyūm fī Tartīb Bilād al-Fayyūm*』である。この写本は全部で 175 葉からなるが、そのうち、171 葉の表までがナーブルスィーによるアイユーブ朝期の記録となっており、172 葉の裏面から 175 葉の裏面までがオスマン朝によるエジプト統治初年の徴税調査記録になっている。

(12) ザヒーラ庁とは、国家財政の危機的状況が露呈したチェルケス・マムルーク朝



ジュ年度 923 年<sup>(13)</sup>の徴税結果が記録されている。基本の記録内容は、各村のハラージュ (kharāj: 地租)、ディヤーファの徴税額とその内訳であるが、農地や灌漑設備に問題が生じている村については、簡潔な状況の説明が付されており、この部分が当時の灌漑設備の維持管理のあり方を知る上で有用である。

- ② 『ファイユーム県ハラージュ年度 933/1527-8 年の土地調査台帳 *Daftar al-Tarbi‘ Wilāyat al-Fayyūm*』 ([Reg. 3001-000113])

ハラージュ年度 933/1527-8 年の徴税調査記録の写しである。各村の土地権利 (ミーリー、ワクフ、リザク)、ハラージュ、諸財源 (jihāt)、固定経費の記録を得る事ができる<sup>(14)</sup>。

- ③ 『ファイユーム県ハラージュ年度 934/1528-9 年の土地調査台帳 *Daftar al-Tarbi‘ Wilāyat al-Fayyūm*』 ([Reg. 3001-000115])

ハラージュ年度 934/1528-9 年の徴税調査記録の写しである。記録内容については、ハラージュの課税対象となった作物の栽培面積と課税額が得られるという点において②よりも詳しい記録を含むなどの違いはあるが、基本的な記録項目は②と同じである。

- ④ 『ユースフ運河の取水台帳 *Daftar Irtifā‘ al-Miyāh bi-Baḥr Sayyid-nā Yūsuf*

---

↘ 期において拡大・発展した政庁である。従来、各政庁はそれぞれの財源の中で運営されていたが、経済の悪化に伴い、様々な財源をザヒーラ庁の下に一元的に集中させ、それらをスルターン直轄財源として各政庁の赤字を補填するなど、政庁の枠にとられない柔軟な運用がなされるようになった。ザヒーラ庁については、五十嵐による詳細な研究 [Igarashi 2010; 五十嵐 2011: 92-124] を参照。

(13) ハラージュ年度 (al-sana al-kharājiya) はコプト暦に対応した記年法である。コプト暦はトウト月 (グレゴリウス暦の 9 月 11 日から始まる) を 1 年の始まりとする太陽暦である。一方、ヒジュラ暦は太陰暦である為 1 年がコプト暦に比べておよそ 33 分の 1 短く、季節とのずれが生じる為、小麦を中心とする穀物からなるハラージュはコプト暦に従って徴収され、記録された [Poliak 1939: 21; Rabie 1972: 133; 佐藤 1986: 250, n. 21; Sato 1997: 127, n. 7]。

(14) ハラージュ年度 933/1527-8 年の土地調査は、オスマン朝がエジプト州で初めて行なった調査として位置づけられている。これによって得られた記録は、以後、行政の基本記録として参照された。詳細については、[Rawḍa: 53r; Afifi 1991: 39-40; Michel 1996: 122; 熊倉 2009: 64-65] を参照。

‘*an al-Qabḍa al-Yūsufīya Tābi‘ Wilāyat al-Fayyūm*』 ([Reg. 3001-024266 ; 3001-024267])

948/1541 年に編纂された台帳の写しである。小運河ごとにそれから給水している村を纏め、各村に割当てられた取水量を記録したものである。また、その取水量が変更される際に発行された命令書の写しも綴じられている。現在、2冊の伝世を確認できる。

⑤ 『ファイユーム県の軍務台帳 *Daftar Jayshī*』 ([Reg. 3001-000106])

9/16 世紀半ばに編纂された土地台帳であり、ワクフと私有地の登記簿である。ワクフや私有地の権利者が村ごとに記録されている<sup>(15)</sup>。この他、総督会議から地方法廷に発布された命令書やファイユーム県のシャリーア法廷で確認された土地および水利問題に関する証書 (ḥujja) の写しも綴じられており、本稿の史料としてはこの部分が有用である。

⑥ 『上エジプトのジスル台帳 *Daftar Jusūr Wilāyat al-Wajh al-Qibli*』 ([Reg. 3001-001905])

956/1550 年に上エジプトにおいて実施された灌漑用の土手であるジスル (jisr) の調査記録である。上エジプトにある政府管理のジスル (スルターニー・ジスル)<sup>(16)</sup> ごとに、その管理責任者、ジスルの状態、維持管理にかかった費用などについての記録を得る事ができる<sup>(17)</sup>。

以上が本稿の主史料である。なお、史料に登場する村名が現在の名称と異なる場合は、史料に記載されている村名を採用し、初出時に註を付してラムズィー Muḥammad Ramzī の『地理事典 *al-Qāmūs al-Jughrafi*』に記載される現代の正式名称を書き入れた。

(15) 『軍務台帳』の編纂過程と記録内容の詳細については、[Michel 1996; 熊倉 2009] を参照。

(16) 詳細は本稿、註 22 を参照。

(17) 『ジスル台帳』の記録内容の詳細については、[Michel 1995; 熊倉 2013: 53-54, 73] を参照。

## 2. ファイユーム県の地理的特色と位置づけ

ファイユーム県はカイロから南へナイル川を遡上すること 100 キロメートル、そこからリビア砂漠に向かって西へ 25 キロメートルのところに位置する（【地図】を参照）。一帯は盆地になっており、ナイル川の支流であるユースフ運河 Baḥr Yūsuf が行き着く現在のカールーン湖 Birkat al-Qārūn の海拔はおよそ マイナス 30 メートル、ファイユームの玄関口に位置するラーフーン Lāhūn 村周辺との高低差は 50～60 メートルである。この地形によって、ファイユーム県の位置する地域は、ナイル川の水量を調節する役割を果たしてきた。現在では、アスワン・ハイダムや各所に設けられた堰によって、ナイル川の水量は制御されているが、19 世紀以前の時代においては人間による水の制御には限界があり、ナイル川は季節ごとに流量を変えた。また、増水期におけるナイル川の流量は必ずしも毎年一定というわけではなく、年によっては洪水を引き起す事もあった。このような自然環境において、古代王朝期以降、ファイユーム県はナイル川が適正な水量を上回った際の遊水池として機能していたと考えられている [Rapoport and Shahar 2012: 2]。そして、プトレマイオス朝 (B.C 306-B.C 30) 期にこの地域の開拓が始まり、傾斜を利用してユースフ運河から大小の枝運河が掘られ、村々が潤されてきた<sup>(18)</sup>。

この地域の特殊性はその灌漑方法にある。通常、ナイル川流域では「ベイスン灌漑」と呼ばれる方法によって灌漑が行なわれていた。それは、夏季に水位が増すナイル川の水を、ジスルで仕切った区画に引き入れ、自然に水が引く

(18) ナーブルスィーに拠れば、アイユブ朝時代、ユースフ運河からは 58 の小運河に水が引かれ、その先に設けられた分水場 (maqsīm) から用水路 (tur'a) を経て各村に水が供給された。それらの河岸には夏作物の揚水車 (sāqiya) が 242 台、砂糖きび圧搾用の石臼 (aḥjār al-ma'ašir) が 6 台、粉ひき用の水車 (ṭāhūn) が 8 台設置されていたと言う [Ta'rikh: 6-7; MS. Ayasofya 2960: 6r]。ファイユーム県の開拓史や地理については、[Mu'jam al-Buldān 4: 286-288; Nuzha: 228-232; Nashq: 45r-46v; Boak 1926: 353-356; 佐藤 1986: 246-266; Rapoport and Shahar online: "The Fayyum"] などを参照。



までの 40 日間程度圃場を冠水するというものであった<sup>(19)</sup>。しかし、ファイユーム県の場合、この灌漑法が採られたのはラーフーン村から盆地に至る谷間の地域と、盆地の南端に位置するガラク Gharaq 地域のみであり、そこから先の盆地に広がる耕地は、運河沿いに設置された水車での揚水により灌漑されていた<sup>(20)</sup>。さらに、ラーフーン村には水量調節用のダムがあり、ナイル川が減水し始めると、ここで水を塞き止めて、運河の水がナイル川に逆流するのを防いだ。これにより、ナイル川の減水期の冬季においてでさえも、灌漑に必要な水が得られたと見られる [Sūrat al-Ard: 147; Ta'rikh: 11-12; Nuzha: 230; 佐藤 1986: 266]。

この灌漑方法の違いは、こ

表 2 15 世紀後半の見込み税収高 (ibra) と村数

地 域	見込み税収高 (単位は dinār jayshī)	村数 (*1)
下エジプト		
カイロ近郊	135,075	20
カルユービーヤ	419,850	59
シャルキーヤ	1,411,875	380
ダカフリーヤ	596,571 (*2)	217
ダミエッタ近郊	11,600 (*3)	12
ガルビーヤ	2,144,080 (*4)	471
ミヌーフィーヤ	574,629	232
イブヤール、ジャズイー ラ・パニー・ナスル	114,132 (*5)	46
ブハイラ	741,294	222
フウワ	56,846	16
ナスタラーワ	43,500	6
アレキサンドリア近郊	11,000	8
ギザ	[62,000] (*6)	N.A
上エジプト		
イトフィーフィーヤ	143,997 (*7)	50
ファイユーム	164,050	97
バフナサーウィーヤ	1,302,642	256
ウシュムーナイン	762,040	103
アスユート	323,920	32
イフミーム	243,925	26
クース	414,663 (*8)	N.A

註：

\*1 MS. Hunt 2 では得られない為 *Tuhfa* を参照。

\*2 *Tuhfa* では、596,071。\*3 *Tuhfa* では、21,100。

\*4 *Tuhfa* では、1,844,080。\*5 *Tuhfa* では、100,232。

\*6 MS. Hunt 2 では得られない為 *Tuhfa* を参照。

\*7 *Tuhfa* では、1,043,997。\*8 *Tuhfa* では、414,663。

(MS. Hunt 2 および *Tuhfa* を参照して筆者作成)

(19) ベイスン灌漑の構造については、[長沢 2013: 251-269] の解説が最も詳しい。他、[Borsch 2000; 加藤 2010; 熊倉 2013: 49-50] も参照。

(20) アイユーブ朝期ファイユーム県におけるベイスン灌漑地域と水路灌漑地域の地理的分布については、[Rapoport and Shahar 2012: 16] において地図上に示されている。オスマン朝の分布状況もこれとほぼ同じである事がジスルの設置状況の記録から裏付けられる [Reg. 3001-001905: 2v-4r]。

の地域における農業にも特色をもたらした。ベイスン灌漑地域においては、9月から10月末まで圃場を冠水させる為、その時期が栽培時期に重なる作物を栽培する事ができない。従って、通常、ベイスン灌漑地域では、冬作を中心とした一毛作が基本であり、夏作や果樹類はジスルや居住地周辺などの冠水しない高台で一部栽培されるに留まった [Richards 1982: 14-19]。一方、ファイユーム県では、1年を通じて灌漑が可能であった事から、二毛作が可能であった<sup>(21)</sup>。ここに、農業におけるファイユーム県の重要性を指摘する事ができる。9/15世紀末の地方別のイブラ (ibra: 見込み税収高) を見ると、ファイユーム地方は決して突出したものではない (【表2】)。しかし、エジプト州ではファイユーム県の盆地部や西方砂漠のオアシスを除く大半の地域でベイスン灌漑に基づく農業が営まれていた事を考慮すると、夏作物や果樹類の収穫が望めるファイユーム県はエジプト州の中でも特殊な位置を占めていたと言えるであろう。このような地域を対象とした考察の結果を、他の地域にも適用する事ができるかについては、結語にて若干の検討を加えたいと思う。それでは、ファイユーム県における灌漑の維持管理の仕組みに注目していこう。

### 3. 灌漑の維持管理の仕組み

エジプト州においてベイスン灌漑が行われていた地域では、ジスルが最も重要な灌漑設備であった。このジスルは、複数の村に影響する大規模なスルターニー・ジスルと1つの村のみに影響するバラディー・ジスル (jisr baladī: 村のジスル) に大分され<sup>(22)</sup>、前者は政府、後者はその村のイクター保有者及び村人

(21) ハラージュ年度 933/1527-8 年と 934/1528-9 年の土地調査台帳から、小麦 (qamḥ), 大麦 (sha'ir), ソラ豆 (fūl) といった冬作物の他に、エンドウ豆 (bisilla), ゴマ (simsim), サトウキビ (qaṣab al-sukkar), 米 (aruzz), 綿 (quṭn) といった夏作物、また、オリーブ (zaytūn), ブドウ ('inab), ザクロ (rummān), アンズ (mishmish), イチジク (tin), レモン (laymūn) などの果樹の栽培が確認できる [Reg. 3001-000113; Reg. 3001-000115]。

(22) スルターニー・ジスルとバラディー・ジスルの違いはその規模であり、村のジスルであるバラディー・ジスルに対し、スルターニー・ジスルは数村から数十村ノ

によって管理された [Qawānīn : 232 ; Ṣubḥ III : 444-445 ; Zubda : 129]。一方、ファイユーム県の盆地部における水路灌漑には、灌漑用運河 (baḥr) や用水路 (tur'a) の浚渫や、上流域から下流域までの水供給を維持する為の取水量の割当てと厳守といった水管理は不可欠であり、然るべき人材、労働力、そして財源を要したと考えられる<sup>(23)</sup>。しかし、運河や用水路の維持管理がどのように行われていたかについての詳細は明らかではない。そこでまず、ジスルの維持管理の区分に則り、運河や用水路を複数の村に影響するものと村内のものに分け、各々の維持管理費がどのように捻出されていたかについて見ていく。次に、これらの管理にはどのようなアクターが関与したかについて検討していきたい。

### (1) 灌漑設備の維持管理費

#### 複数の村に影響する運河の場合

ファイユーム県では、1本の小運河を複数の村が共同で利用し、各村に対して取水量が規定されていた。例えば、イブシャウィーヤト・アッルツマーン Ibshawiyat al-Rummān 村とビビージュ・アンシュ Bibij Anshū 村、アブー・クサー Abū Ksā 村、アジャミーン 'Ajamiyīn 村の4村は1つの小運河によって灌漑され、取水量が規定されていた（【表3】を参照。表中、カブダで表された数字が規定の取水量）。

このような共同利用の運河の維持管理には、政府によって各村からそのための税が特別に徴収されていたと考えられる。「カーヌーン・ナーメ」では、マムルーク朝スルターン・カーイトバーイ時代からの慣行として、カーシフが

↘ に影響を与えた。スルターニー・ジスルは、概ねナイルに対して垂直で、一定の間隔で設置された堰の機能を持つ土手であったと見られる [熊倉 2013 : 54-56, 67-68]。

(23) 例えば、ナーブルスィーによれば、「(アイユーブ朝の) 政庁にはユースフ運河の浚渫に注意を払った記録はなく、100年以上もの間、それを管理するための費用の支払いがなかった」ために水不足が生じていたという [Ta'rikh : 6 ; MS. Ayasofya 2960 : 5v]。

表3 『ユースフ運河の取水台帳』に見る取水量の記録 [Reg. 3001-024267: 20]

Maqsim al-Ma'sūba 運河 (baħr)		
68 カブダ (qabḍa) <sup>(27)</sup>		
方面 (bi-jiha)——	方面 (bi-jiha)——	方面 (bi-jiha)——
Ibshawiyat al-Rummān 村	Abū Ksā 村	al-'Ajamiyin 村
Bibij Anshū 村		
36 カブダ	20 カブダ	12 カブダ
Ibshawiyat al-Rummān	Bibij Anshū	そして追加された——
24 カブダ	12 カブダ	A. H1104 年サファル月 17
		日付の法的証書に従って
		8 カブダ
		合計——
		20 カブダ

ジスルの修復や浚渫に充てる為の税を徴収する事が規定された<sup>(24)</sup>。「カーヌー  
ン・ナーメ」の中では、カーシフは灌漑設備の維持管理だけでなく、管轄県内  
での徴税にも責任を持つ者として規定された事から、カーシフはハラージュの  
徴収に際してジスルの修復や浚渫に充てる為の税も併せて徴収していた事が推  
測される<sup>(25)</sup>。一方、『土地調査台帳』を見ると、ファイユーム県の村々からの  
税は、地租であるハラージュ、歓待料として徴収されるディヤーファ<sup>(26)</sup>、その

ㄨ (24) 「これ（カーシフの税 (rūsumi kūshufiyyet)）以外には、カーイトバーイの時  
代に実行されていた法において定められたジスルの建設や修復と浚渫に充てる為  
の税が徴収される。集められた税はジスルの建設や修復と浚渫に費やされ、残っ  
たものについては、カーシフは金庫へ送らなければならない [Kānūnnāme: 361]」。

(25) 「カーイトバーイの時代にそうであったように、各々のカーシフの管轄地域にあ  
る土地において賦課されたものを『租税台帳』に従って十全に集め、国庫に送る  
事はカーシフの責任と義務である。現在もこれまで通りこの法に準ずる事とする。  
各々のカーシフが管轄する範囲において必要な事は、村々に良質の土地を十全に  
耕作する事を命じ、会計の台帳に従って生じる賦課されたもの及びハラージュを  
集め、非冠水地を除く良質の土地から全てのハラージュ税を完全に集めて国庫へ  
送る事である [Kānūnnāme: 360]」。

(26) ディヤーファとは、本来、農民がムクターに提出する歓待用の貢納物の事であ  
る [Nihāya 8: 245; *Khiṭa* 1: 88, 103; Poliak 1937: 106; idem 1939: 67; 佐藤 1986:  
235; Sato 1997: 149]。オスマン朝統治初年の徴税調査記録では、鶏 (dajāj), 地  
ガチョウ (iwazz baladī), 羊 (ghanam) といった家禽・家畜類, 白米 (aruzz  
mubyadd), 小麦 (qamḥ) といった穀物, ゴマ油 (shiraj), 塩漬けオリーブ  
(zaytūn mamlūh) といった加工品が挙げられている [MS. Ayasofya 2960: 173r-ア



他諸税 (jihāt) という項目から成っていたが、諸税の中に「泥土の監督費 (kashf al-turab)」や「荒廃部分の監督費 (kashf al-khirab)」が計上されている村が多く見受けられる [Reg. 3001-000113; 3001-000115]。これらの税の具体的な内容は明らかではないが、その項目名から、上述のカーシフによって徴収される税にあたるものではないかと考えられる。

さらに、『土地調査台帳』では、この「泥土の監督費」あるいは「荒廃部分の監督費」を含めた諸税とハラージュやディヤーファの合計額から、最終的に経費 (maṣārif) として「スルターンの浚渫費 (al-jarrāfa al-sultāniya)」が差し引かれている事例が複数見られる。例えば、ファイユーム県の北東部に位置するウドワ・スィーラー 'Udwa Silā 村は、耕作地 1,043 ファッダーン (faddān) に冬小麦、春小麦 (rabī'), ソラ豆を栽培し、230 ディーナールの税収高 (irtifa') が見込まれる村であった。ハラージュ年度 933 年のハラージュは 159 ディーナール、また荒廃部分の監督費 82 ディーナールを含む諸税からの収益が 147 ディーナールであった<sup>(27)</sup>。ここから経費として、財務費 (ustādāriya) 66 ディーナール、アラブ部族 ('urbān) への支払い<sup>(28)</sup> 50 ディーナール、スルターンの浚渫費 76 ディーナールが差し引かれ、残額が税収として国庫に送金されたと見られる [Reg. 3001-000113: no. 15]。また、フィディーミン Fidimīn 村では、荒廃部分の監督費 16 ディーナールを含む税収 884 ディーナールから、経費としてスルターンの浚渫費 83 ディーナールが差し引かれた。この記録には、ス

↘ 175v]。

(27) カブダは取水量の単位で「ひとにぎりの長さ」を表す。分水場において各村に引かれる水路の幅をこの単位を用いて示したと考えられる [佐藤 1986: 333-346; Sato 1977: 222-225; Repoport and Shahar 2012: 14-21]。

(28) 具体的には、保護料 (ḥimāya) とナトロンの代金 (thaman) 57 ディーナール、荒廃部分の監督費 (kashf al-khirab) 82 ディーナール、貢納 (taqdima) と官房費 (dawādāriya) 8 ディーナールが諸税として計上されている。

(29) 記録では、通常「アラブ部族」とのみ記されるか、下欄に「ファザーラ族 Fazāra」のように部族名が併記された。ウドワ・スィーラー村の記録においても、「アラブ部族」の下部に部族名あるいは家名と思われる al-Ṭurmālāt が記されている。

ルターンの浚渫費の内訳が記されており、この内の半分が「村外 (khārijat al-nāhiya)」に、もう半分がファイユーム県にあるトゥブハール Ṭubhār 村の灌漑設備の修復に充てられた事がわかる [Reg. 3001-000113: no. 6]。このように、政府が管理する大規模灌漑設備には、「泥土の監督費」や「荒廃部分の監督費」といった税が徴収され、それを含む村の税収からスルターンの浚渫費が確保されていた事がわかる。

この他、水利用料が課税されている村が多く見られた。例えば、『ハラージュ年度 934 年の土地調査台帳』に拠れば、ナカーリーファ Naqālifa 村では、ハラージュ 759 ディーナール、ディヤーファ 141 ディーナール、ジャフバザ (jahbadha)<sup>(30)</sup> 42 ディーナールに加えて、「ブドウ園と水利用料からの税収 (irtifa' tahta thaman al-kurūm wa taṣrif-hum fī al-miyāh)」という名目で 240 ディーナールが徴収された。この前年の同村の記録にはその内訳が記されており、それによれば、計 8 つの果樹園で生産されるブドウ、ザクロ、オリーブといった果実を対象とし、果実ごとにその代価 (thaman) が銀貨 (dirham) で計算され、その合計を金貨に換算した額が上記の税として計上された事がわかる [Reg. 3001-000113: no. 7]。このように、水利用料の課税対象は必ず果樹園の生産物であった<sup>(31)</sup>。水の適切な分配が必須となるこの地域において、果樹園への

(30) 本記録に見られる「ジャフバザ」はこのジャフバズの税と同様のものと考えられる。ジャフバズ (jahbadh, 複 jahābidha) とは、サーサーン朝行政における gahbadh に由来し、貨幣についての専門的な知識を有し、政府の出納係、両替、徴税などの財務を取り扱う者であったと考えられている。貨幣の複本位制の下では、様々な貨幣による取引において、ジャフバズの役割は不可欠であった。3/9 世紀および 4/10 世紀のアラビア語で記されたバビルス文書には、ジャフバズへの言及が多く見られるようであるが、そのうちの「ジャフバズの税 (māl al-jahābidha, ḥaqq al-jahābidha)」はジャフバズによる政府の財務代行料であり、納税者が支払うものであった [Qawānīn: 304; 岡崎 1961; Cahen 1962: 250-251 (n. 4); Fischel 1965; 清水 1998: 548]。

(31) この税はハラージュの分類の内、「ハラージュ・ラーティブ (kharāj rātib)」に相当すると考えられる。ヌワイリー al-Nuwayri (732/1332 年没) による、バフリール・マムルーク朝時代の百科事典『学芸の究極の目的 *Nihāyat al-Arab fī Funūn al-Adab*』に拠れば、ハラージュ・ラーティブとは、揚水車 (sawāqī), 果樹園への

課税は、灌漑と農業のバランスを保つ為にも重要であった事の徴証であり、その意味ではこれもまた灌漑設備の維持管理費の一種と見なす事ができるであろう。

#### 村の用水路の場合

一方、村内の用水路などについては、必要に応じてその村の税収の一部が維持管理費として充てられたと考えられる。例えば、下記のように、オスマン朝統治初年の徴税調査記録におけるサンフル Sanhūr, ドウムワ・アッダースイラ Dumwa al-Dāthira 村の記録では、村人がその年の税収の中から灌漑設備の修繕のための経費を支払った事がわかる。

サンフル Sanhūr, ドウムワ・アッダースイラ Dumwa al-Dāthira 村 ——

現在のところ、ハラージュ年度 924 年には、前述の村の大部分は非灌漑地 (sharāqī) である。[これは、] 故カーンスーフ・アルハムスミア Qānṣūh al-Khamsmī'a のワクフにおいて 2 本の用水路を引くための (用水路を囲う) 塀 (hā'it) が崩壊したためである。この村の割当て (tawjīb) を担っているのは、その祖父がよく知られていたユヌス Yūnus b. Fayāḍ b. Muḥammad b. Khaṭṭāb と、その祖父が知られていたムハンマド Muḥammad b. Zayd b. Aḥmad であり、彼らはこの村のシャイフ (shaykh: 長) であり農民である。年間の夏作と冬作について彼らが述べるところによれば、2 村に課された本来の合計のうち、前述の [カーンスーフの] 娘の寛大なる案内の門 (bāb al-adilla al-karīma) によって彼らに定められているのは、合計 120,000 ディルハムであった。そして彼らが述べるところに

---

ㄨ (bustān), ナツメヤシ (nakhīl) を対象とするハラージュの一種であり、それぞれの収穫時期に現金で納められたと言う [Nihāya 8: 253-254]。通常のハラージュが麦類や米などの穀物のみを対象としたのに対し、ハラージュ・ラーティブはその対象外である果実類に掛けられるものであった。この税は他地域においても見られたようであるが [Qawānīn: 239]、ファイユーム県においては、この税の徴収に当たって「水利用料」という名目が付されていた事に注目すべきである。

よれば、ハラージュ年度 923 年において耕された 2 人の土地からのハラージュは、2 村の大部分が非灌漑地であったため、30,000 デイルハムであった。2 人はそれを、その村の土地に水が通るように、村の塀もしくは土手(jisr)の建設に投じたと述べた [MS. Ayasofya 2960: 175r]。

2 村はいずれも、マムルーク朝時代末期のアミール (amīr: 軍団長) であったカーンスーフ・アルハムスミア (908/1502 年没) が設定したワクフ地であったが、オスマン朝統治初年においては、ワクフ地の形をとりつつも、その税収はザヒーラ庁の財源となっていたと見られる。記録では、ユーススとムハンマドという 2 人の村人が村の「割当て (tawjib)」を担っていた事がわかるが、それはすなわち、この 2 人が村に課された税や、担当官が検分する事について報告する責務を負っていたという事であると解釈する事ができる<sup>(32)</sup>。このように、政府の担当者と在村の代表との間にこのような契約関係が結ばれ、収税や勧農の実質的な作業が在村の者に割当てられた事が推察される。さて、その報告に拠れば、用水路の塀の崩壊によって農地が十分に灌漑されず、税収は見込まれた額の 4 分の 1 に留まったが、村人たちはそれを灌漑設備の修復に充てたと言う。このように、村の収入の一部をその村の灌漑設備の維持管理費に充てると言う事例は、『土地調査台帳』においても確認する事ができる<sup>(33)</sup>。

以上見てきたように、複数の村が共同で利用する運河の維持管理には、カー

(32) 記録の中で「割当て」と訳したタウジープは、「課す事」、「義務づける事」を意味するアラビア語であるが、この史料の文脈では、政府と在村の者が結ぶ、税に関する契約関係の事を意味すると考えられるので、「割当て」と訳するのが妥当であろう。

(33) 例えば、先述のフィディーミン村の事例がある。フィディーミン村では、村の税収 884 ディーナールから、「スルタンの浚渫費」とは別に、村の浚渫のために 63 ディーナールが支払われた。この他、土を盛ってジスルや用水路の側壁を強化するための「土盛り費 (mudammasa)」を、経費として計上した村も見られる。アクアービー al-Ak'ābi 村 (現在のカーアービー al-Ka'ābi 村 [Ramzi 1994: vol. 2-3 111]) は税収 280 ディーナールの中から、6 ディーナールが土盛り費に充てられた [Reg. 3001-000113: no. 12]。

シフによって「泥土の監督費」や「荒廃部分の監督費」といった名目で税が集められ、それらを合わせた各村の政府収入の一部がスルターンの浚渫費として充てられた。一方、村内部の灌漑設備の維持管理には、村の収入の一部が充てられた。いずれの場合も、維持管理費用は村々から徴収される恒常的な税の中から捻出されていた事がわかる。マムルーク朝期からの連続性に注目すれば、村内の灌漑設備の維持費に村の税収の一部が充てられた事は、イクター制においてイクター保有者がイクター収入の中で灌漑設備と農地の維持管理を行う構図と基本的には変わらないと見なす事ができよう。一方、共同の灌漑設備の維持管理費についても、カーシフによって集められる税はマムルーク朝期にも見られたものであり、オスマン朝によって継承されたとと言える。ただし、オスマン朝の徴税記録に見られるように、各村からの政府収入も総額の一部がスルターンの浚渫費として割当てられた事がマムルーク朝期から継承された方式であったかについては、さらなる検討が必要であろう。なぜならば、マムルーク朝期とオスマン朝期では土地制度が異なり、政府が直接徴税を行っていた16世紀前半のオスマン朝初期の状況（エマーネット制）と、政府が土地の徴税権を分与していたマムルーク朝の状況（イクター制）の違いを慎重に扱う必要がある為である。この点については、マムルーク朝期における徴税や、政府管理の灌漑設備の維持管理費がどのように捻出されていたかを具体的に明らかにする必要がある。

## (2) 維持管理の割当てとアクター

次に、灌漑設備がどのように維持されていたかについてであるが、共同利用の灌漑設備の場合、近隣の村々に管理の担当範囲が割当てられていたと考えられる。まず、ファイユーム県の東部に見られるベイスン灌漑地域では、16世紀前半のファイユーム県には5つのスルターニー・ジスルと2つのバラディー・ジスルが設置されていた事が確認できる<sup>34)</sup>。これらのジスルの実質的

(34) ファイユーム県東部の入り口部分に位置するスルターニー・ジスルであるジスル・マンヤル・アルギーターン Jisr Manyal al-Ghiṭān とそれに連結する2つのバ

な管理 (darak) は、スルターニー・ジスルであれ、バラディー・ジスルであれ、ジスルが設置されている村に委ねられた<sup>(35)</sup>。ただし、前節で見たように、バラディー・ジスルは村の税収の中から維持管理費が捻出されたのに対し、スルターニー・ジスルの補修には政府から先述のスルタンの浚渫費が充てられたという点が異なっていたと考えられる。

一方、ユースフ運河や支運河の日常的な管理については、史料から直接的な情報が得られないものの、ジスルと同様に、一定の範囲が近隣の村に割当てられていた事が推察される。例えば、ナイル・デルタの西側に位置するブハイラ県の中心都市ダマンフル Damanhūr のシャリーア法廷台帳からは、17 世紀の運河の維持管理についての記録を得る事ができる。それによれば、アシュラフィーヤ運河 Khaliḡ Ashrafi (後のマフムディーヤ運河) はナイルのラシード支流とアレキサンドリアを結ぶ大運河であったが、その管理は東西で二分されており、東側の流域は運河近隣の 8 村に管理 (darak) が割当てられていた<sup>(36)</sup>。こ

ㄨ ラディー・ジスルであるハッワーラ・アジュラーン Hawwāra 'Ajlān 村 (現在のハッワーラ・アドゥラーン Hawwāra 'Adlān 村 [Ramzī 1994: vol. 2-3 103-104]) のジスルとディマシュキーン・アルバサル Dimashqīn al-Baṣal 村 (現在のディミシュキーン Dimishqīn 村 [Ramzī 1994: vol. 2-3 99]) のジスル、またそれらの北に位置するラーフーン村のスルターニー・ジスル、そしてガラク Gharaḡ 地域に設置された 3 つのスルターニー・ジスルがあった [Reg. 3001-001905: 2b-4a]。

(35) これは、ナイル・デルタの状況と異なる。ナイル・デルタのスルターニー・ジスルは複数の村を跨ぐ大規模なものであり、各村に一定の管理範囲を割当てつつ、複数の村が維持管理を担った [熊倉 2013: 56-57]。一方、ファイユーム県のスルターニー・ジスルには複数の村を跨ぐような大規模のものはなかった為、そのジスルが設置された村に管理が割当てられた [Reg. 3001-001905: 2b-4a]。なお、ジスルの管理は、夏場の増水期にはジスルの決壊を防ぐ為に土盛りや見回りをを行い、冬場の減水期には耕地や水路に溜まった泥土をさらい、崩れたジスルを補修する事であった [Qawānīn: 235 (n. 1); Reg. 3001-001904; Reg. 3001-001906; 熊倉 2013: 56-58]。

(36) 管理が割当てられたのは、スルンバーイ Surunbāy 村、アトフ al-'Aṭf 村、シャイフ al-Shaykh 村 (現在のミンシャー・アリームーン Minshā Arīmūn [Ramzī 1994: vol. 2-2 276])、サナーバーダ Sanābāda 村、ミニヤー・アティーヤ Miniya 'Aṭīya 村、ナーシリヤー al-Nāṣiriya 村 (現在のカフル・ニクラー Kafr Niklā)

れと同様にして、ユースフ運河の場合も、運河近隣の村々に浚渫などの管理が委ねられていたと考えられる。

それでは、その管理を担ったアクター達はどのような面々であったのであろうか。村内の灌漑設備については、前節で見たように、基本的にはその村の構成員で管理されたと考えられるので、ここでは、複数の村が共同で利用する灌漑設備の管理に焦点を当てて見ていきたい。ここで注目すべきは、共同利用の灌漑設備の維持管理には、政府・県・地域（灌漑圏）・村の各单位から代表者が出され、それぞれが担当範囲を管理するという複層的な構造をとっていたという点であり、これはバイスン灌漑地域においても共通して見られる特徴でもある〔熊倉 2013: 58-61〕。それでは順に見ていこう。

#### ① カーシフ

まず、政府側のアクターとしては、バフナサーウィーヤ県およびファイユーム県におけるスルターニー・ジスルのカーシフ (kāshif al-jusūr al-sultāniya bi al-Fayyūm wa al-Bahnasāwiya) が挙げられる。「カーヌーン・ナーメ」では、カーシフは県 (wilāya) ごとに任命され<sup>(37)</sup>、管轄県内のジスルや水路の維持管理に努め、農地を最適状態に保ち、徴税を十全に行う事が規定された。すなわち、その職務はエジプトの土地から最大の利益を引き出し、それを国庫に送る事であった<sup>(38)</sup>。その顔ぶれについて史料から分かる限りでは、923/1517 年か

↘ [Ramzī 1994: vol. 2-2 275]], マフザン al-Makhzan 村 (現在のミンシャー・アルハッザーン Minshā al-Khazzān に該当か [Ramzī 1994: vol. 2-2 291]), ビスィンターワイー Bisintāwāy 村。これらの村々は浚渫などの作業を終えると、村のシャイフやハウリーといった責任者がダマンフル法廷に赴き、法廷で浚渫作業の報告を行なった。その記録がダマンフル法廷の台帳に綴じられている。例えば、[Reg. 1088-000002: 131-132 (no. 246), 230 (no. 419); Reg. 1088-000003: 102 (no. 173)] を参照。ファイユーム県の場合、法廷台帳の伝世が確認されていない為、このような詳細な記録を得る事が困難である。

(37) ファイユーム県は、例外的に、隣接するバフナサーウィーヤ県と合わせて 1 名のカーシフが任命された [Kānūnnāme: 360; MS. Ayasofya 2960: 172v]。

(38) 16 世紀のカーシフの役割については、[Kānūnnāme: 360-363; Shaw 1962: 60; Winter 1992: 16; 熊倉 2013: 60] を参照。例えば、オスマン朝統治初年の徴税調査記録では、カーシフ自ら財務官を伴って村々を回り、その年度の税収や灌漑の

ら 929/1523 年までは、ジャーニム・ミン・ダウラート・バーイ（没 929/1423）<sup>(39)</sup>、また就任開始時期は定かではないが、951/1544-5 年までジャーニム・ミン・カスルーフ Jānim min Qaşrūh（没 954/1547-8）<sup>(40)</sup>といったマムルーク朝のアミールであった人物が登用されていた<sup>(41)</sup>。いずれのジャーニムも、カーシフ在任中に巡礼隊長（amīr al-hajj）という重職に任じられており、ファイユーム県とバフナサーウィーヤ県のカーシフ職の重要性が窺われる<sup>(42)</sup>。

## ② ユースフ運河の証人

次に、地元の代表者として「ユースフ運河の証人（shāhid al-Baḥr al-Yūsufi）」がいる。管見の限り、このアクターの存在を確認できる史料はオスマン朝統治初年の徴税記録の序文が最初である。この序文は、地元を代表して「ファイユーム県のシャリーアの裁定者」であるカーディー・シハーブ・アッディーン・アルクラシー Shihāb al-Dīn al-Qurashī が徴税調査に立会った事を伝えている<sup>(43)</sup>。またその序文によれば、彼は「ユースフ運河の証人であり、ウドゥー

↙ 状況調査を行った事が分かる [MS. Ayasofya 2960: 172v-173r]。

(39) このジャーニムは、929/1523 年にガルビーヤ県のカーシフであるイーナルと共にオスマン朝からの独立を目指す反乱を起こした人物である（本稿、2 頁）。この反乱はオスマン朝軍によって鎮圧され、ジャーニムは殺害された。彼については [Holt 1966: 47-48; Winter 1992: 14] を参照。

(40) このアミールは、ガウリー Qāṣṣūh Ghawrī（位 906-22/1501-16）のマムルーク軍団の出身で、マムルーク朝治下ではガウリーの息子ムハンマドのダワーダール（dawādār: 官房長官）を務めたマムルーク軍人である [al-Durar 1: 534]。

(41) MS. Ayasofya 2960 は、ジャーニム・ミン・カスルーフに献呈された写本であり、その末尾にはジャーニム・ミン・ダウラート・バーイがカーシフを務めた時のファイユーム県におけるザヒーラ庁財源の徴税記録を収録したものである。

(42) ジャーニム・ミン・ダウラートバーイは 926/1519-20 年から 929/1523 年まで、ジャーニム・ミン・カスルーフは 946/1539-40 年から 951/1544-5 年まで巡礼隊長を務めた [Badā'i' 5: 355, 379, 394, 407, 443, 476; al-Durar 1: 500, 503, 534]。

(43) MS. Ayasofya 2960 の序文において、徴税調査記録に立ち会った人々が次のように記されている。「ファイユーム県（iqlīm）における現在耕作されている村々の割当て（tawjīb）。その村々の一部は、偉大なる王のスルターンである我らの庇護者（中略）セリム Salīm Shāh al-Khunkār al-A'ẓam の治世において、勝利の王国の高貴なるザヒーラ庁（Dīwān al-Dhakhira）に返還された。これはハラージュ



ル様」であった。この「証人 (shāhid, 複 shuhūd)」と「ウドゥール ('udūl)」とは、「アッシューフド・アルウドゥール」あるいは「シャーヒド・アドル」と呼ばれ、主としてカーディーに随伴して証言や種々の確定作業を行う役職と同一である<sup>(44)</sup>。実際に、オスマン朝統治初年の徴税調査記録における各村の記録部分には、シハーブ・アッディーンの証言が参照されている事例も見られる<sup>(45)</sup>。また、後に詳述するが、『ユースフ運河の取水台帳』はユースフ運河の証人が管理していた取水記録に基づいて編まれたものであった。これらの事から、この人物が村々の租税の状況や各村のユースフ運河の取水量を把握し、管理する役割を担っていたと考えられる<sup>(46)</sup>。

ㄨ 年度 923/1517-8 年 [の記録] である。この割当てを担ったのは、バフナサーウィーヤ県のスルターンの高貴なる土地測量のウスターダール (ustādār al-misāḥa al-sultānya) である (敬称略) マーマーイ・ミン・カーニバーイ Māmāy min Qānibāy, そしてファイユーム県とバフナサーウィーヤ県のスルターニー・ジスルのカーシフであり総督 (nā'ib al-saltāna) であるジャーニム・ミン・ダウラートバーイ Jānim min Dawlātbāy, そして (祈願文略) 財務の至高なるカーディーであるワリー・アッディーン Walī al-Dīn 'Abd al-Qādir al-Nashīlī とカーディーであるシャムス・アッディーン Shams al-Dīn Muḥammad al-Ṣafnāwī である。そして、ファイユーム県におけるシャリーアの裁定者 (al-ḥākim al-shar'ī) である至高なるカーディー・シハーブ・アッディーン— [彼は] ユースフ運河の証人 (shāhid al-Baḥr al-Yūsufī) でありウドゥール様 (al-sādat al-'udūl) である。そして後述する村々の人びとが立ち会った [MS. Ayasofya 2960: 172v-173r]】。

(44) アブド・アッラシード 'Abd al-Rashīd によれば、マムルーク朝期のウドゥール職の職務内容は、売買や賃貸契約等に立会い、その正当性を確定し、契約文書に署名してその内容が真正である事を証言する事、官僚たちが作成した租税に関する台帳に署名をする事、また検地の際にその地域にやってきた官吏のもとに出向き、地域の村々の土地や農民についての情報を伝える事などであった ['Abd al-Rashīd 1999: 66-67; Michel 2012: 194-196]。

(45) アクアビー村の過去の課税額は、シハーブ・アッディーンの証言によって確認された [MS. Ayasofya 2960: 174r]。

(46) ユースフ運河の証人がいつから存在するかについては明らかではない。また、オスマン朝統治初年の徴税調査記録において、ユースフ運河の証人として登場するシハーブ・アッディーンに「ファイユーム県のシャリーアの裁定者」という尊称が付されていることから、彼が尋常一様のカーディーではなかった事が推測される。

### ③ ハウリー

次に、村の代表者としては、灌漑や農地の維持に責任を持つ者として村のハウリー (khawli) の存在が挙げられる。ハウリーは、土地についての知識があり、耕地やその種類によく通じている者としてアイユーブ朝やマムルーク朝期の史料においても認められる<sup>(47)</sup>。

ファイユーム県のベイスン灌漑地域では、村のハウリーがスルターニー・ジスルの維持管理に関わる作業監督を担った<sup>(48)</sup>。この事は「スルターニー・ジスルのハウリー」がスルターニー・ジスル全体の監督を行ったナイル・デルタの状況と異なるが<sup>(49)</sup>、それはファイユーム県に設置されたスルターニー・ジスルが1村で管理できるような比較的小規模なものであった事に起因すると考えられる。

一方、水路灌漑の地域においては、村の領域を跨いで運河や用水路の管理を統括するハウリーの存在は確認されていない。このことから、日常的には、各村のハウリーが村の灌漑設備だけでなく、共同利用の灌漑設備の維持管理についても一定の責任を果たしていたと考えられる。ハウリーの監督の下で浚渫や取水量の管理がなされたと考えられるが、現実には村々の間で水争いが起こる事もあった。例えば、タミーヤ Ṭamiya 村<sup>(50)</sup>とルーダ Rūḍa 村の事例がある。この2村は隣接し、共通の運河から取水する村であったが、両村の間には取水量をめぐる再三摩擦が生じた。『軍務台帳』に綴じられた 965/1558 年の証書の写しには、この水争いの発端が記されている。ファイユーム県のシャリーア

(47) アイユーブ朝期とマムルーク朝期におけるハウリーについては、[Qawānīn: 278; Shaw 1962: 54-55; 'Abd al-Rahīm 1986: 50-54; 佐藤 1986: 299-300; Sato 1997: 186; 'Abd al-Rashīd 1999: 61-62; Michel 2012: 197-203] を参照。

(48) ハウリーたちは、冬場の減水期に、村から必要なシャベル (jarārīf) と犁 (muqalqilāt) を集め、ジスルを規定の形状に修復する責任を負った [Reg. 3001-001905: 2v-4r]。また、増水期には、ジスルを切る際の立会いやジスルの決壊防止に努め、ジスルの維持管理作業の指揮を執った [熊倉 2013: 59]。

(49) ナイル・デルタに見られたスルターニー・ジスルのハウリーについては、[熊倉 2013: 58-60] を参照。

(50) 現在のターミーヤ Ṭāmiya 村に当たる [Ramzī 1994: 113-114]。

法廷のカーディー・ムハンマド Muḥammad b. Muṣṭafā の署名入りのこの証書に拠れば、当時タミーヤ村はダシーシャ・ワクフ<sup>(51)</sup>の財源であったが、その管財人 (nāẓir) が次のような申立てをした。それは、タミーヤ村とルーダ村の取水量は従来5カブダずつであったが、分水場においてルーダ村の囲いが満水にならないとタミーヤ村に給水されなくなってしまうと言う。実は、両村の間には先代のカーディー・サファル Ṣafar の時代にも水争いが生じていたのであるが、その際、カーディーがタミーヤ村の前述の分水場の西側にタミーヤ村への給水路 (misqā) を設置して解決を図ったのであった。しかし、その後ルーダ村の人々はこの給水路を塞ぎ止め、以前の状態に戻ってしまった。そこでこの申立てによって、灌漑設備の調査が行われ、カーシフであるムハンマド・ジャーウィーシュ Muḥammad Jāwīsh によって届けられた命令書 (mithāl) が、出廷した両村のシャイフと農民らの前で読まれた。その内容は、タミーヤ村への給水路に5カブダの水が流れるようにとの事であった [Reg. 3001-000106: 41a]。しかし、両村の間には、その後も取水量をめぐって悶着があったようである。『ユースフ運河の取水台帳』に綴じられている命令書には、1102/1691年、タミーヤ村の取水量が10カブダに変更された事が示されている [Reg. 3001-024267: 45-46]。その経緯はタミーヤ村のカーイム・マカーム (qā'im maqām: 代理官) であるアミール・イスマールがカーディーであるハサン・アフアンディー Ḥasan Afandī に対して取水量についての登記簿調査を求めた事に始まる。カーディーがファイユーム県のシャリーア法廷に保管された台帳 (sijill) を調査した結果、1081/1670-1年には5カブダであったが、同年カイロの総督会議から発行された命令書では、タミーヤ村に10カブダを分配する決定が記されていた。これに従い、ハサン・アフアンディーは10カブダの分配を採用した。これを受け、両村のハウリーたちは水源からの流れを管理し、これに違反する事を禁じ、この出来事について記録したと言う。このように、村落間で水分配の問題が生じた場合は、シャリーア法廷やカイロの総督会議が介

(51) ダシーシャ・ワクフとは、二聖都の貧者に小麦粥 (dashisha) を分配する為に設定されたワクフである [伊藤 2011: 32]。

入して解決が図られたのであるが、最終的には、ハウリーに日常の取水量の管理が委ねられたのである。

#### ④ アラブ部族

これらのアクターの他、ファイユーム県では、流域単位でアラブ部族が灌漑の維持管理に関わっていた可能性が認められる。アイユーブ朝時代においては、1つの水系に1つの部族が居住していた事が観察され、これを、その水系沿いの上流から下流の村々への水供給の安定化の為とする見方がある [Rapoport and Shahal 2012: 25-28]。一方、オスマン朝時代においても、「カーヌーン・ナーメ」には、アラブ部族のシャイフがカーシフの補佐的役割を果たす事が規定されている<sup>(52)</sup>。また、『土地調査台帳』には、ほとんどの村に「慣習 (‘ada)」や「代理 (niyāba)」という名目で税収の一部が特定のアラブ部族に対して支払われた記録があり、各部族が特定の地域において一定の役割を果たしていた事が示唆される<sup>(53)</sup>。

以上が灌漑の維持管理における主要なアクターであるが、先のタミーヤ村とルーダ村の水分配の事例に見たように、水利問題は多くの場合、その村の受益者による申立てによって露呈し、解決がはかられた。その点では、維持管理に直接携わらずとも、このような受益者の存在は看過できないであろう。それは、先の例に見たように、ワクフであれば管財人であり、イルティザーム制においてはムルタズィム (multazim: 徴税請負人) やその代理人であった。また、イクター制では、イクター保有者がこの位置を占めていた。イクター制の廃止からイルティザーム制の普及までの状況については、史料から情報を得る事が難しいが、イクター保有者に代わって農村での徴税を担ったアミーン (amīn: 徴税

(52) アラブ部族のシャイフは、耕地と灌漑設備の維持管理を担い、農民たちに対して冠水地の耕作を命じる事、村を警備する事、スルターンの諸税を集める事が規定された [Ḳānūnnāme: 363-364]。

(53) 例えば、本稿 16 頁のウドワ・スィーラー村の例を参照。また、先のフィディーミン村では、税収 734 ディーナールから 12 ディーナールが代理 (niyāba) の名目でアラブ部族に割当てられているが、このような例は他の村においてもしばしば見られる [Reg. 3001-000113: no. 6]。

官)がこの位置をある程度埋めたであろう<sup>(54)</sup>。

これまで見てきたように、ファイユーム県における大規模な灌漑設備の維持管理については、政府が村々からの税収の中からそのための費用を捻出した一方、実際の維持管理に係る作業を担ったのは、カーシフ、村のハウリー、ユースフ運河の証人、アラブ部族、土地の受益者といったアクターであった。その管理の特徴は、様々な社会集団から選出されたアクター各々が県・流域・村といった範囲を担い、全体として複層的な管理が為されていた点にある。アクターの顔ぶれは土地制度や政治的状况の影響を受けて多少の変化があった可能性はあるが、複層的な管理体制の構造は、マムルーク朝から大きく変化する事なく引き継がれたと見てよいであろう。

#### 4. 維持管理における記録管理の変化

16世紀半ばに近づく、灌漑の維持管理における記録管理のあり方に変化が見られるようになる。948/1541年に編纂された『ユースフ運河の取水台帳』の序文には、下記の文言が記されている。

写し (şūra) —————  
 ユースフー彼に祈りと平安あれー運河の取水台帳。ユースフ運河の証人 (shāhid al-Baḥr al-Yūsufī) であるアブール・ファドル・ブン・シハーブ・アッディーン・アルクラシー Abū al-Faḍl b. Shihāb al-Dīn al-Qurashī の台帳 (daftar) に従った、ファイユーム県に属する後述の村々のユースフ運河やその他の〔小運河からの〕取水量 (qabḍa) について。ヒジュラ暦 948年ムハッラム月1日/1541年4月27日付。

[Reg. 3001-024267: 17]

この文言は、当該台帳がアブール・ファドルなる人物の元にあった台帳に基づ

(54) アミーンについては、[Shaw 1962: 31-32; idem 1968: 93-94] を参照。

いて作成されたものである事を示している。この人物は、そのナサブ (nasab: 系譜) から、オスマン朝統治初年においてユースフ運河の証人であったカーディー・シハブ・アッディーン・アルクラシーの子と判断できる。この事から、ユースフ運河の証人という役割が、父から子へと受け継がれたと考えられる。さらに彼は、ユースフ運河の証人として、父親が管理していた取水記録を継承したと考えられる。すなわち、1541 年に行われた『ユースフ運河の取水台帳』の編纂とは、ユースフ運河の証人を担ったクラシー家父子が管理してきた取水記録をオスマン朝政府が複製し、管理下に置くという記録管理体制の変換であったと言える<sup>(55)</sup>。

また、同時期には、ジスルの記録管理においても、特定の人物が管理してきた情報が、オスマン朝政府の管理する台帳として編纂された。オスマン朝政府は、956/1550 年にファイユーム県を含む上エジプトのジスルに関する体系的な調査を行った。その調査は、カーシフ一行にスルターンのジスルの管理に当たる地元のハウリーたち (khawlā' bil-jusūr al-sultāniya) が加わり、調査隊はハウリーが管理していた記録を検分し、その結果を台帳に纏めた。これが本稿の主史料の 1 つである『ジスル台帳』である。

このように、16 世紀半ばを目前とした時期に、オスマン朝政府は従来ユースフ運河の証人やハウリーといった地元の代表者が管理してきた水利行政に関わる記録を収集し、台帳の編纂を進めた。これにより、従来特定の人物が管理していた記録が、担当機関を通じてオスマン朝政府が管理する体制が整備されていったのである。ここに、水利行政の記録管理のあり方における変化を指摘する事ができる。

この水利行政に関わる一連の記録の収集と台帳編纂の動きは、スレイマン 1 世時代の中央集権化の動きと連動したものと見るべきであろう。この時期、オスマン朝の中央では、スルターンを頂点とする支配組織が確立されると共に、

---

(55) 『ユースフ運河の取水台帳』は、村の取水量に変更が生じるたびに新たな記録が加えられる形で更新され、同時に記録更新の資料として命令書や上申書が写された。現存する台帳の中の最新の日付は 1208/1793-4 年であり、早くとも 18 世紀末までこの台帳が参照されていた事が分かる。

地方においても財務・文書行政・司法・軍事の各部門の組織化が進められ、中央と結びつけられた〔鈴木 1997: 121-124〕。また、944/1537 年にミュラーゼメット制が成立して以降、任官資格者名簿に従って任期付きで地方のシャリーア法廷に派遣されるカーディーが司法を通じて地方行政の一端を担うようになっていった<sup>(56)</sup>。これについてはエジプト州も例外ではない。927/1521 年以降カイロにおける司法と土地記録にオスマン朝政府が介入し、記録管理のあり方が変化した<sup>(57)</sup>。そして、その 20 年後には、ファイユーム県の水利行政に関わる記録がオスマン朝政府によって再編成されたのである。すなわち、この動きは、カイロの総督府が行った記録の収集と台帳編纂が地方行政をも対象にして拡大したものと捉える事ができる。このようにして従来地元の特定の家や個人が管理していた記録が政府機関の管理下に置かれた結果、中央から派遣されて来たカーディーがそれらの記録を参照し、システムティックに業務を遂行する事が可能になったと考えられる。それゆえ、この地方における記録管理の変化は、エジプト州がオスマン朝の官僚制に基づく中央集権的統治体制の中に組み込まれていく一過程として位置づける事ができる。

## 結 語

本稿では、ファイユーム県における水利行政に注目し、16 世紀のオスマン朝の統治体制の中でのエジプト州の位置づけについて考察してきた。その結果、

(56) 地方行政において地方都市の法廷が果たした役割については、〔Shaw 1962: 59; El-Nahal 1979: 65-68; 林 2008: 216-217〕を参照。

(57) 927/1521 年以降、イスタンブルからスレイマン 1 世の勅令がエジプト州総督ハーイルバク（位 923-8/1517-22）の元に届けられ、それに基づく司法改革が進められた。一連の改革において、従来カーディーや公証人が管理していた台帳（dafatir）をカーディー・アルアスカルのナーイブ（nā'ib: 代理）に提出する事が命じられるなどした。また、929/1523 年には州総督ムスタファ・パシャ（位 928-9/1522-3）がマムルーク朝期に軍務庁の財務官を務めたジーアーン家に対し、彼らが管理する土地記録の提出を命じ、それらの土地記録をカイロの総督府が管理するようになった〔Michel 2013: 252-258〕。

灌漑設備の維持管理費確保の仕組みや管理体制はマムルーク朝期の構造が概ね維持された一方、記録管理においては従来特定の家や個人が管理していた記録がオスマン朝の政府機関によって管理されるようになったという変化が明らかとなった。そして、この記録管理の変化は、スレイマン1世時代の中央集権的統治システムの構築と連動したものであったという見解を示した。

最後に、この連続性と変化はエジプト州の他の地域においても見られたかについて検討を加えたい。結論から言えば、ファイユーム県について本稿で論じた事は他地域についても適用できると考える。既述のように、ナイル流域の地域はバイスン灌漑地域であり、水路灌漑が主流のファイユーム県とでは灌漑方法が異なる。それゆえ、他地域においては『ユースフ運河の取水台帳』のような台帳は見られないが、ジスルの維持管理の為に編まれた『ジスル台帳』は同様にして編纂された。945/1539年にカルユービーヤ県、946/1539年にブハイラ県、ガルビーヤ県、ミヌーフィーヤ県の調査が行なわれ、その記録を収めた台帳が編纂されており、上エジプトの調査よりもデルタ地域の方が10年程早く記録化が進められた事になる<sup>(58)</sup>。この調査においても、上エジプトと同様、スルターンのジスルの管理を担当するハウリーの陳述を記録しながら進められたのであった。

さて、地方の水利行政に見られる記録管理の変化は、オスマン朝の官僚制に基づく統治体制がエジプト州の地方統治においても浸透していく過程として捉えられ、その後のエジプト州の地方統治体制に変化をもたらしたと考えられる。第1に、水利行政に関する基礎情報が纏められ、政府機関によって管理されるようになった。第2に、地方・カイロ・イスタンブル間を結ぶ記録管理の道筋をつくり、各種文書の遣取を通じて、エジプト州の地方の水利行政についても中央およびカイロの総督府の介入が容易になった。第3に、地域の状況に通じていない人物でも、記録を参照して状況を把握する事が容易になり、カーシフ

(58) 上エジプトでは、バヌー・ウマル Banū 'Umar を中心としたアラブ部族勢力が根強く、オスマン朝政府が介入するのが困難であった事がこの理由として考えられる。16世紀におけるアラブ部族の動向については、[Winter 1992: 90-102; Aharoni 2003: 421-425]を参照。



職やカーディー職の人事異動がシステムティックに行えるようになった。このように、本稿において見た 16 世紀における記録管理の変化は、17 世紀以降展開する地方法廷—総督会議—御前会議の文書行政と、それに基づく水利行政の出発点と見なす事ができる。

## 主要参考文献

### 【文書史料】

#### ■ エジプト国立文書館所蔵文書

『ハラージュ年度 933/1527-8 の土地調査台帳』：[Reg. 3001-000113]

『ハラージュ年度 934/1528-9 の土地調査台帳』：[Reg. 3001-000115]

『ユースフ運河の取水台帳』：[Reg. 3001-024266; 3001-024267]

『ファイユーム県の軍務台帳』：[Reg. 3001-000106]

『ジスル台帳』：ガルビーヤ県・ミヌーフィーヤ県 [Reg. 3001-001904]；カルユービーヤ県・ブハイラ県 [Reg. 3001-001906]；上エジプト [Reg. 3001-001905]

法廷台帳 (17 世紀以降)：ガルビーヤ県マハッラ・クブラー法廷台帳 [Reg. 1033-007351; 1033-007352; 1033-007360]；ダカフリーヤ県マンスーラ法廷台帳 [Reg. 1058-000001; 1058-000002; 1058-000003; 1058-000004; 1058-000005; 1058-000006; 1058-000007; 1058-000008]；ブハイラ県ダマンフル法廷台帳 [Reg. 1088-000001; 1088-000002; 1088-000003; 1088-000004]

### 【写本史料】

MS. Ayasofya 2960 : al-Nābulusī, Fakhr al-Dīn 'Uthmān. *Kitāb Izhār Šan'at al-Ḥayy al-Qayyūm fī Tartīb Bilād al-Fayyūm*. Istanbul: Süleymaniye Kütüphanesi, MS. Ayasofya 2960.

MS. Hunt 2 : Ibn al-Jī'ān, Sharaf al-Dīn Yaḥyā. *Kitāb al-Tuhfa al-Saniya bi-Asmā' al-Bilād al-Miṣriya*. Oxford : Bodleian Library, MS. Huntington 2.

Nashq : Ibn Iyās, Muḥammad b. Aḥmad al-Jarkasī. *Kitāb Nashq al-Azhār fī 'Ajā'ib al-Aqtār*. Istanbul: Süleymaniye Kütüphanesi, MS. Denizli 317.

Rawḍa : Ibn Abī al-Surūr, Muḥammad b. Muḥammad. *al-Rawḍa al-Zahīya fī wulāt Miṣr wal-Qāhira al-Mu'izziya*. Oxford : Bodleian Library, MS. Pococke 80.

### 【刊行史料】

*Badā'i'* : Ibn Iyās, Muḥammad b. Aḥmad al-Jarkasī. *Badā'i' al-Zuhūr fī Waqā'i' al-Duhūr*. Muḥammad Muṣṭafā ed. 5 vols. Wiesbaden : Franz Steiner Publishing House, 1960-75.

*al-Durar* : al-Jazirī, 'Abd al-Qādir b. Muḥammad. *al-Durar al-Farā'id al-Munazzama fī Akhbār al-Ḥāj wa Tarīq Makka al-Mu'azzama*. 2 vols. Beirut : Dār al-Kutub

- al-'İlmîya, 2002.
- Khiṭaṭ*: al-Maqrizî, Taqî al-Dîn Aḥmad. *al-Mawā'iz wal-I'tibâr fî Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthâr*. 2 vols. Bulaq, 1270H.
- Mu'jam al-Buldân*: Yāqūt, Shihāb al-Dîn Abū 'Abd Allāh al-Ḥamawî, *Mu'jam al-Buldân*. 5 vols. Beirut: Dār Ṣādir, 1955-57.
- Nihāya*: al-Nuwayrî, Shihāb al-Dîn Aḥmad. *Nihāyat al-Arab fî Funūn al-Adab*. 31 vols. (vol. 1-18) Cairo: Dār al-Kutub al-Miṣriya, 1923-55; (vol. 19-31) Cairo: al-Hay'a al-Miṣriya al-'Āmma lil-Kitāb, 1975-1992.
- Nuzha*: Ibn Iyās, Muḥammad b. Aḥmad al-Jarkasî. *Nuzhat al-Umam al-'Ajā'ib wal-Ḥikam*. Cairo: Maktaba Madbūlî, 1995.
- Ḳānūnnāme*: Barkan, Ömer Lütfî. *XV ve XVI inci Asırlarda Osmanlı İmparatorluğunda Zirai Ekonominin Hukukî ve Malî Esasları, vol. 1: Kanunlar*. Istanbul: Bühraneddin Matbaası, 1943.
- Qawānîn*: Ibn Mammātî, al-'As'ad b. Muḥadhdhab. *Kitāb Qawānîn al-Dawāwîn*. A. S. Atiya ed. Cairo: al-Jamā'iya al-Zirā'iya al-Mulkiya, 1943.
- Subḥ*: al-Qalqashandî, Shihāb al-Dîn Aḥmad. *Subḥ al-A'shā fî Ṣinā'at al-Inshā'*. 14 vols. Cairo: Wizārat al-Thaqāfa wa al-Irshād al-Qawmî, 1913-22.
- Ṣūrat al-Arḍ*: Ibn Ḥawqal, Abūal-Qāsim al-Naṣībî. *Kitāb Ṣūrat al-Arḍ*. J. H. Krammers ed. Leiden: E. J. Brill, 1967.
- Ta'rikkh*: al-Nābulusî, Fakhr al-Dîn 'Uthmān. *Ta'rikkh al-Fayyūm wa Bilādi-hi*. B. Moritz ed. Repr. Beirut: Dār al-Jir, 1974.
- Tuḥfa*: Ibn al-Ji'ān, Sharaf al-Dîn Yaḥyā. *Kitāb al-Tuḥfa al-Saniya bi-Asmā' al-Bilād al-Miṣriya*. Cairo: Maktabat al-Kulliyāt al-Azhariya, 1974.
- Zubda*: al-Ẓāhirî, *Zubda Kashf al-Mamālik wa Bayān al-Ṭurk wal-Masālik*. Cairo: Dār al-'Arab lil-Bustānî, 1988-89.

#### 【参考文献】

- 'Abd al-Raḥīm, 'Abd al-Raḥīm 1986. *al-Rif al-Miṣrî fî al-Qarn al-Thāmin 'Ashar*. Cairo: Maktaba Madbūlî (Repr. Dār al-Kitāb al-Jāmi'î, 2004).
- 'Abd al-Rashîd, Majdî 1999. *al-Qarya al-Miṣriya fî 'Aṣr Salāṭîn al-Mamālik 648-923/1250-1517*. Cairo: al-Hay'a al-Miṣriya al-'Āmma lil-Kitāb.
- Afifî, Muḥammad 1991. *al-Awqāf wal-Hayā al-Iqtisādiyya fî Miṣr fî al-'Aṣr al-'Uthmānî*. Cairo: al-Hay'a al-Miṣriya al-'Āmma lil-Kitāb.
- Aharoni, Reuven 2003. "Bedouin and Mamluks in Egypt — Co-Existence in a State of Duality." *The Mamluks in Egyptian and Syrian Politics and Society*. Michael Winter and Amalia Levanonî ed. Leiden: E. J. Brill: 407-434.
- Boak, A. E. R. 1926. "Irrigation and Population in the Faiyūm, the Garden of Egypt," *The Geographical Review*. XVI(3): 353-364.

- Borsch, Stuart J. 2000. "Nile Floods and the Irrigation System in Fifteenth-Century Egypt." *Mamlūk Studies Review*. IV : 131–145.
- Cahen, Claude 1962. "Contribution à l'étude des impôts dans l'Égypte médiévale." *Journal of the Economic and Social History of the Orient*. 5 : 244–278.
- El-Nahal, Galal H. 1979. *The Judicial Administration of Ottoman Egypt in the Seventeenth Century*. Minneapolis & Chicago : Bibliotheca Islamica.
- Fischel, W. J. 1965. "DJAHBADH." *Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> Edition. B. Lewis et al. eds. vol. 2 : 382–383.
- Hathaway, Jane 1997. *The Politics of Households in Ottoman Egypt : The Rise of the Qazdağlıs*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 2003. "Mamluk "Revivals" and Mamluk Nostalgia in Ottoman Egypt." *The Mamluks in Egyptian and Syrian Politics and Society*. Michael Winter and Amalia Levanoni (ed.), Leiden : E. J. Brill : 387–406.
- 2008. *The Arab Lands under Ottoman Rule, 1516–1800*. Harlow : Pearson.
- Hanna, Nelly 2012. "Egyptian Civilian Society and Tax-Farming in the Aftermath of the Ottoman Conquest." *Conquête ottomane de l'Égypte (1517) : arrière-plan, impact, échos*. B. Lellouch and N. Michel ed. Leiden : Brill : 211–223.
- Holt, Peter M. 1966. *Egypt and the Fertile Crescent 1516–1922*. New York : Cornell University Press.
- 1968a. "Ottoman Egypt (1517–1798) : An Account of Arabic Historical Sources." *Political and Social Change in Modern Egypt : Historical Studies from the Ottoman Conquest to the United Arab Republic*. London : Cambridge University Press : 3–12.
- 1968b. "The Pattern of Egyptian Political History from 1517 to 1798." *Political and Social Change in Modern Egypt : Historical Studies from the Ottoman Conquest to the United Arab Republic*. London : Cambridge University Press : 79–90.
- Igarashi, Daisuke 2010. "The Evolution of the Sultanate Fisc and al-Dhakhira during the Circassian Mamluk Period." *Mamlūk Studies Review*. 14 : 85–108.
- İnalçık, Halil 1973. *The Ottoman Empire : The Classical Age 1300–1600*. London : Praeger Publishers (Repr. London : A. D. Caratzas, 1989).
- Lellouch, Benjamin 2006. *Les Ottomans en Égypte : Historiens et conquérants au XVI<sup>e</sup> siècle*. Leuven : Peeters.
- Masters, Bruce 2013. *The Arabs of the Ottoman Empire, 1516–1918 : A Social and Cultural History*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Michel, Nicolas 1995. "Les Dafatir al-ğusūr, source pour l'histoire du réseau hydraulique de l'Égypte ottomane." *Annales Islamologiques* 29 : 151–168.
- 1996. "Les rizaq ihbâsiyya, terres agricoles en mainmorte dans l'Égypte

- mamelouke et ottoman. Étude sur les Dafâtir al-aḥbās ottomans." *Annales Islamologiques*. 30 : 105–198.
- 2012. "Spécialistes villageois de la terre et de l'eau en Égypte (XIIe–XVIIe siècle)." *Faire la prevue de la propriété. Droits et saviors en Méditerranée*. École française de Rome ("Collection de l'École française de Rome" 452) : 177–209.
- 2013. "«Les circassiens avaient brûlé les registres»." *Conquête ottomane de l'Égypte (1517). Arrière-plan, impact, échos*. Leiden : Brill : 225–268.
- Mikhail, Alan 2010. "An Irrigated Empire: The View from Ottoman Fayyum." *International Journal of Middle East Studies*. 42 : 569–590.
- 2011. *Nature and Empire in Ottoman Egypt: An Environmental History*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Poliak, Abraham N. 1937. "Some Notes on the Feudal System of the Mamlūks." *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* : 97–107.
- 1939. *Feudalism in Egypt, Syria, Palestine, and the Lebanon, 1250–1900*. London : Royal Asiatic Society (Repr. Philadelphia : Porcupine Press, 1977).
- Rabie, Hassanein 1972. *The Financial System of Egypt, A. H. 564–741/A. D. 1169–1341*. London : Oxford University Press.
- Ramzī, Muḥammad. *Al-Qāmūs al-Jughrāfī li al-Bilād al-Miṣriya min 'Ahd Qudamā' al-Miṣriyīn ilā sana 1945*. 4 vols. Cairo : al-Hay'a al-Miṣriya al-'Āmma lil-Kitāb, 1994.
- Rapoport, Yossef and Shahar, Ido 2012. "Irrigation in the Medieval Islamic Fayyum : Local Control in a Large-Scale Hydraulic System." *Journal of the Economic and Social History of the Orient*. 55(1) : 1–31.
- online. *Rural Society in Medieval Islam*. <http://www2.history.qmul.ac.uk/ruralsocietyislam/> (最終アクセス日 : 2014 年 2 月 28 日)
- Richards, Alan 1982. *Egypt's Agricultural Development, 1800–1980 : Technical and Social Change*. Boulder : Westview Press.
- Sato, Tsugitaka 1997. *State and Rural Society in Medieval Islam : Sultans, Muqta's and Fallahun*. Leiden : E. J. Brill.
- Shafei, Ali 1940 : "Fayoum Irrigation as Described by Nabulsi in 1245 A. D. with a Discription of the Present System of Irrigation and a Note on Lake Moeris." *Bulletin de la société de géographie d'Égypte*. 20(3) : 283–327.
- Şahin, Kaya 2013. *Empire and Power in the Reign of Süleyman : Narrating the Sixteenth-Century Ottoman World*. New York : Cambridge University Press.
- Shaw, Stanford 1962. *The Financial and Administrative Organization and Development of Ottoman Egypt 1517–1798*. Princeton : Princeton University Press.
- 1968. "Turkish Source-Materials for Egyptian History." *Political and Social*

- Change in Modern Egypt: Historical Studies from the Ottoman Conquest to the United Arab Republic*. London: Cambridge University Press: 28-51.
- Winter, Michael 1992. *Egyptian Society under Ottoman Rule 1517-1798*. London and New York: Routledge.
- 1998a. "Ottoman Egypt, 1525-1609." *The Cambridge History of Egypt, Volume Two*. M. W. Daly ed. Cambridge: Cambridge University Press: 1-33.
- 1998b. "The Re-Emergence of the Mamluks following the Ottoman Conquest." *The Mamluks in Egyptian Politics and Society*. Thomas Philipp and Ulrich Haarmann ed. Cambridge: Cambridge University Press: 87-106.
- 五十嵐大介 2011 『中世イスラーム国家の財政と寄進——後期マムルーク朝の研究——』 刀水書房.
- 伊藤隆郎 2011 「スルターン=カーイトバーイのダシーシャ・ワクフ」 『アジア・アフリカ言語文化研究』 82: 31-60.
- 岡崎正孝 1961 「イスラーム帝国における前期的資本家の一側面——とくに、ジャフバズについて——」 『東洋史研究』 20(1): 23-45.
- 加藤博 2010 「ナイルをめぐる神話と歴史」 『環境と歴史学: 歴史研究の新地平』 勉誠出版: 113-123.
- 熊倉和歌子 2009 「マムルーク朝土地制度史研究における新史料——エジプト国立文書館所蔵オスマン朝土地台帳『軍務台帳』——」 『日本中東学会年報』 25(2): 59-81.
- 2013 「16世紀のナイル灌漑と村落社会——ガルビーヤ県の事例——」 『ナイル・デルタの環境と文明 II』 共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究拠点早稲田大学イスラーム地域研究機構: 49-75.
- 佐藤次高 1986 『中世イスラーム国家とアラブ社会——イクター制の研究——』 山川出版社.
- 清水和裕 1998 「後期アッバース朝の私領地における国庫の取り分——『宰相史』の記述を中心に——」 『東洋史研究』 57(3): 520-551.
- 鈴木董 1993 『オスマン帝国の権力とエリート』 東京大学出版会.
- 1997 『オスマン帝国とイスラーム世界』 東京大学出版会.
- 長沢栄治 2013 『エジプトの自画像——ナイルの思想と地域研究——』, 東京大学東洋文化研究所.
- 林佳世子 2008 『オスマン帝国 500 年の平和 (興亡の世界史第 10 巻)』, 講談社.
- 松尾有里子 1996 「オスマン朝中期におけるミュラーゼメット (教授・法官候補) 制度——『ルメリ・カザスケリ登録簿』を手がかりに」 『日本中東学会年報』 11: 39-69.

[付記] 本研究は平成 25 年度特別研究員奨励費による研究成果の一部である。

period of drastic change.

In conclusion, it could hardly be claimed that translators at the Arsenal were able to perfectly represent Lyell's theory in Chinese. However, it should be recognized that this was a result of the fact that they had chosen information that seemed relevant to Chinese readers of the time from Western geology, which itself was still in its developmental phase. Besides, the fact that that *Dixueqianshi* had been translated as a practical introduction to mineralogy in the first place but later came to be viewed as a guide to evolutionism in China should not be overlooked. These facts should be considered with reference to the innate diversity of geology as a science as well as the expansive worldview which geology would develop.

## **WATER, TAXES AND RECORDS MANAGEMENT IN FAYYUM PROVINCE IN SIXTEENTH CENTURY EGYPT : THE EARLY OTTOMAN RURAL GOVERNMENT SYSTEM AND ITS DEVELOPMENT SEEN FROM THE WATER USE ADMINISTRATION**

KUMAKURA Wakako

In Ottoman history, the sixteenth century is regarded as the epoch in which Suleyman I established a centralized administration. However, how the Ottomans administered Egypt at the time has so far remained ambiguous. The present article examines the way the Ottomans developed their administration of Egypt moving toward centralization, by focusing on the administration of water use in Fayyum province.

Located in middle Egypt, Fayyum province was an area of perennial irrigation supplied by the Yusuf canal, and occupied an important position as a producer of summer crops and fruit. Annual dredging of the canal was vital to maintaining this irrigation, and the expenses for it were met from permanent taxes, as they had been in the most part under the Mamluk dynasty. Those responsible for the maintenance work were the representatives of various social groups, each of whom was assigned a sphere such as a province, a basin or a village, forming a multilayered maintenance structure. Around the mid-sixteenth century, the Ottomans collected records concerning water use administration from the local representatives and compile registers. As a result, records management, which had previously been

done by particular individuals and families, came under Ottoman control. Such a change in records management was not unconnected with Suleyman's centralization, but it also shows that the Ottomans promoted the collection of the records that were necessary for local governance even in the rural areas of Egypt. The collection of records and the compilation of registers by the Ottomans must have enabled the *qādīs* (judges) sent from the central government through the *mülāzemet* system to perform their duties systematically. Hence, the change in records management can be regarded as a step in the process in which Egyptian rural governance was incorporated into the Ottoman bureaucratic administration.